

## 高橋琢也と学生達（疾風怒涛の物語）（2）

友田 燐 夫

Akio TOMODA

東京医科大学生化学講座

**【要約】** 東京医科大学の源流は大正5年5月16日に日本医学専門学校を総退学した学生達と彼らを支援した高橋琢也らの応援者達のドラマチックな話に遡る。また、校歌に歌われている源流2つとは、学生達と順天堂の方々の応援者を意味する。本稿はこの2つの源流の中にあって強靱な精神力でもって東京医学講習所の開設、東京医学専門学校の設立を成し遂げた高橋琢也と学生達との暖かい交流の話を記述したい。とくに本稿では大正5年5月16日の総退学より9月11日の東京医学講習所開設に至るまでの学生達の苦闘を中心に述べる。

### 目次

1. 総退学より高橋琢也訪問までの概略
2. 総退学後の学生会議と学生達の活動
3. 高橋琢也訪問後の学生達の活動
4. ミカド倶楽部における学生後援会懇談会
5. 長委三美の名士訪問
6. 学生会議場への五名士の登場
7. 柳光亭における新校設立懇談会
8. 学生会議における高橋琢也らの新医学校設立の説明と学生団解散
9. エピローグ：東京医学講習所開設への道

### 1. 総退学より高橋琢也訪問までの概略 （大正5年5月16日～6月2日）

表1（巻末）に5月16日から9月11日までの主な出来事をまとめた。本章ではそれらの中で5月16日の総退学より6月2日の高橋琢也訪問までの経緯を概説する。

大正5年5月16日に日本医学専門学校を総退学

した学生達は新医学校の設立を目指して行動を開始した。しかし、学生達が頼りとする学生保証人会\*の人達を中心となっていたのは柔道家の大角桂巖（写真1）であり<sup>1)</sup>、医学校設立には程遠い状況であった。5月22日の学生保証人会は次の方々より構成されていた。

伊東知也、井上角五郎、西沢本次、大角桂巖<sup>2)</sup>、奥宮衛、渡理三郎、金子榮一、茅原廉太郎、吉

平成21年11月11日受付、平成21年11月19日受理

（別冊請求先：〒160-8402 東京都新宿区新宿6-1-1 東京医科大学生化学講座 友田 燐夫）

TEL：03-3351-6466 FAX：03-3351-6466



写真1 大角桂巖（のち東京医学専門学校初代理事）近影

植庄一郎、田村賢一、田代亮助、中岡吉六、蔵原惟郭、熊谷直太、山本実彦、松本正二、丸山長四郎、清水広良、諏訪亀太郎●、鈴木 順

\*学生達の総退学により、日本医学専門学校の学生保証人会は退学した学生達の保証人会と学校に残った学生達の保証人会の二つに分裂したが、本稿では前者を単に「学生保証人会」とし、後者は「日本医学専門学校側の学生保証人会」とする。

この会の責任者は奥宮衛海軍少将であったが、6月2日には脱会した。また、大角桂巖<sup>(○)</sup>と諏訪亀太郎<sup>(●)</sup>とは会議中に口論となり、学生達がなだめる一幕もあった。一方では、総退学した学生達の中にも磯部検蔵に懐柔され日本医学専門学校へ復帰する学生がいた。とくにストライキ主導幹部の旧四年生は後藤哲雄を除いてほとんどが学校に復帰していた。また、学生保証人会の中にも学生達を日本医学専門学校に復帰させ事態を円満に収めようという、いわゆる妥協派の人達（斉藤孝治・東京府会議長ら）がいた。日本医学専門学校側の学生保証会も文部省につよく働きかけたことから、文部省は2つの保証人会の対応に苦慮していた。このような困難な状況で学生達は暗中模索していた。江並猛（第一学年）は6月初めまでの学生達の状況を次の文章で的確に描いている（東京医学専門学校雑誌、高橋琢也追悼号<sup>2)</sup>）。

「幾百と云う学生が一団となって当時の日本医専を同盟退校して善後策を講じている時、東都の名士を訪問して御同情を乞い何とかして目的を達せんことを計ってみたが、同情はしていただけるものの扱て立入って如斯と世話をして下さるお方はなかったので、吾々の力では如何とすることは出来ない。学生も次第々々に興奮し、或は悲観し遂には堅き同盟の陣容も将に乱れんとする時、委員会の席上で広島県出身の長君が高橋先生と云うことを発表したの、長君と他に二三名が先生を訪問することになった。」

学生達の団結がまさに崩壊という状況の中で、後援会係の三輪新一らは寺尾亨を訪問し（恐らく5月末、前号詳述<sup>3)</sup>）、長委三美らは高橋琢也訪問（6月2日、前号詳述<sup>3)</sup>）を訪問した。これによって学生達の活動は新医学校設立という目標に向かって、静かに整然と動き始めた。一方では高橋琢也と寺尾亨とが出馬を決意し、二人による新医学校設立に向けた具体的な行動が開始された。高橋琢也は我国初の「陸軍法典」の編纂や「森林法」の草案作成と制定に関わり、農商務省山林局時代に青森森林学校「私立有餘館」<sup>4)</sup>（写真2）を設立し、大正2年より大正3年までは沖縄県知事として沖縄の近代化に力を注いだ、いわば我国屈指の官僚であり知識人であった。学生達の訪問時、高橋琢也は既に七十の齢となり、白髪白髭であったが、気力と経験においては壮年時代をまさるものがあつた。また、寺尾亨（写真3）は我国の国際法の権威であったが、孫文の主導する辛亥革命に身を投じた優れた軍略家でもあつた。この時、寺尾亨は齢六十に達しようとしていた。高橋琢也と寺尾亨とは孫文<sup>5)</sup>の保護を通して極めて親しい間柄であつたことから<sup>6)7)</sup>、二人が以心伝心で学生達の救済に関わっていったことは想像に難くない。長委三美の日記に<sup>8)</sup>寺尾亨と高橋琢也との会話が残されているが、二人の親しい関係が良く分かる。

「一木内相は官僚主義者であるとはいえ、実に甚だしいもので、元来府県の判任官採用は県知事の掌内にある事となって居るに、一木は大学出身の採用は内務省まで届けてくれと地方庁会議の席上、内訓したそうである。凡て官僚主義とききていたが、かくまでも主義を通そうとは、地方官の権威まで入り込もうとは思わなかつた。」（寺尾亨） 「それは人方の登用につき、



写真2 青森森林学校（私立有餘学館）学生と高橋琢也の集合写真  
高橋琢也先生を中心に柴田伊太郎、小代重太郎、森山逸、奈良義雄、佐藤要之助、豊島国篤、三上重蔵らが並ぶ。



写真3 寺尾亨博士（のち東京医学専門学校初代理事）近影

堂派的の關係も意味し、政略上やるのでしょね。」（高橋琢也）

寺尾亨は高橋琢也の主宰する雑誌「国論」（図1）<sup>9)</sup>にも「支那政局の将来と日本」という題の長文を寄せている。この二人が全力で新医学校設立に係わっていったことで、東京医学講習所が3ヶ月という極めて短期間に開設されたのである。勿論、佐藤進らの順天堂病院の全面的な協力、石黒忠恵、森鷗外を中心とする東京帝大医学部の大応援団の存在なしには医学講習所の開設は不可能であったが、それらの



図1 雑誌国論（東京医学専門学校認可祝賀号 1918年）表紙

方々が重い腰を上げるには高橋琢也の存在がなくてはならなかった。その経緯は前号<sup>3)</sup>に述べた。なお、東京医学講習所は東京物理学校に一時校舎を借りることになるが、寺尾亨の兄、寺尾寿（東京物理学校設立者・初代校長、東京天文台長）の世話があったのであろう。寺尾亨はのちに東京医学専門学校理事となったが、学校の経営には全く関与しない立場を貫いた。年長者の高橋琢也を立てた寺尾亨の姿勢は終始一貫していた。

6月以降、学生達は会議を毎日開き、文部省の動向、日本医学専門学校側の動きを知るとともに、学生達の結束を固めた。議長は毎回交代している。学生達は

本部係（中本富太郎、後藤哲雄、三輪新一、酒井敏雄、須藤力三、青山豪一、後藤吉勇、小谷無違、中村丈夫、古川道之助、市原経太郎、長委三美、江並猛ら）、各学年のクラス代表者、後援会係（小谷無違、三輪新一、長委三美、江並猛ら）、各県人会委員（嘉陽宗正ら）、文部省訪問委員（迫田、緒方、後藤、福島）、文部大臣会見委員（酒井敏雄ら）、記者係、代議士訪問委員、調査係、法律係（鈴木、繁田）、会計部（中本富太郎）、講演会場係、警察係（本保）、同志会本部訪問委員

などの係（委員）を置いて役割を分担し、本部係との連絡を密にした。これらの委員の報告は学生会議において随時行なわれた。このような組織的な動きが円滑に進むのは5月31日以降であり、そこには寺尾亨の戦略的示唆があった可能性が高い。5月31日の学生会議では、調査係が協議して、

「軍隊制度を採りて命令伝達を秘密裏に速ならしむ事」

と決定された。また、6月2日の高橋琢也訪問より医学校設立に向けた新たな動きが急速に出てきた。学生達の救済のために出馬を告げた高橋琢也は長委三美らに

「大いに委員を派してあらゆる人を訪うのである。この発起人（学生保証人会のメンバー）はよく知った人もあるようであるが、今もう少し立派な人格の人を入れたらよかろう。人は面白きもので、その人により大いに如何でもなるのである。（中略）その他、佐藤男（佐藤進）もよかろう。原（敬）、犬養（毅）もよかろう。あらゆる有識に願うのである。」

と言い、学生達を叱咤激励したのである。ここで高橋琢也が佐藤進の名前をまず挙げているのは注目される。新医学校の設立には佐藤進をおいて他にはいないことを高橋琢也は良く知っていた。原敬や犬養毅ものちに東京医学専門学校設立への協賛者となった。学生達は早速、各県人会訪問委員を作り、佐藤進（順天堂病院長、元陸軍軍医総監）（写真4）、佐藤達次郎（順天堂副病院長）（写真5）、森鷗外（元陸軍軍医総監）、石黒忠恵（元陸軍軍医総監）（写真6）、本多忠夫（海軍軍医総監）、山川健次郎（東京帝大総長）、本多静男（東京帝大農学部教授）ら、医学界や帝国大学の有力者を訪問することとなった。これらの方々は高橋琢也の大きな人脈に連なる



写真4 佐藤進男爵（のち東京医学講習所顧問）近影



写真5 佐藤達次郎博士（のち東京医学専門学校初代校長）近影



写真6 石黒忠恵男爵近影

人達であった。

次章に学生達がのちに編纂した「奮闘の半年」<sup>1)</sup>に記述された5月23日以降の日記をもとに、6月2日に高橋琢也を訪問するまでの学生達の会議の様子を記述する。

## 2. 総退学後の学生会議と学生達の活動 （大正5年5月23日～6月1日）

五月二十三日（火） 開会午後一時 議長 関基（旧）  
高嶋秀勝（四）

磯部側にては学生有志保証人会の名目の下に保証人を集めて学生に反対に出でんとするを以て、学生は各自保証人を充分説くべき事となしぬ。異分子除名説出たるもその旗幟鮮明なる者を除名なし、然らざる者を之を除名なさざる事と決す。

五月二十四日（水） 第二回公開演説 開会 午後五時 於神田青年会館

開会の辞 迫田君 経過報告 学生委員 後藤哲夫君

敵に非ず 青柳有美氏 止むを得ざるストライキ 文学士 大町桂月

感想 大角桂巖氏 一大事一小事 大野晚睦

十時二十分に閉会せり。

五月二十五日（木） 開会 午後一時 議長 影本速男（旧四）

副 山本仁（四） 第三回公開演説会開催につき日時会場等は委員に付託のこと。代議士及新聞記者訪問のこと。後援会保証人学生懇談会開催のこと。後援会委員伊東知也氏渡支につき学生一同東京駅に集合なし送別し、帰途一同日本病院を訪問せんとせる。折しも万一を慮り警官十数名警戒せると睨み合いて散会す。

五月二十六日（金） 後援会名士訪問のため奔走。次の端書来る。

本校第一回卒業試験、大正五年六月十五日より施行の事に相定め候条。受験者は来る六月五日迄に卒業受験料を納付すべし。尚今回の試験に受験せざる者は明年度の卒業試験期にあらざれば受験するを得ざる規定に有之候間、為念申添置候。 大正五年五月二十五日

私立日本医学専門学校

五月二十七日（土） 午前八時 開会 議長 後藤吉勇（旧）

議事を進め、後援会のことにつき大角邸に四年小川東洋、佐藤理兵衛二氏を送りて、其後の経過を尋ね、一元社に茅原（華山）氏を訪いて報告しぬ。また学校側よりは父兄に勧誘状を送り、又卒業試験の通知を發して盛んに団体を乱さんとする故を以て、学生側にも父兄に夫々安心せしむべき事となる。

五月二八日（日） 開会午後一時 議長 青山豪一（旧四） 副 今藤（三）

本日公開演説に出席弁士決定、発表せられたり。学生は任意に磯部氏宅に居寄り醸金の返済を請求すること。

五月二十九日（月） 開会午前九時 議長 中本富太郎（旧） 副 片岡巳代治（三）

日本病院（磯部検蔵所有の日本医学専門学校付属病院）には全学生にて決行なす事となれり。斯く決定の結果、十一時半散会して、午後六時日本病院前に集合せり。然るに又もや警官隊の警衛厳なるも、早や激したる学生は之か圧迫をも顧みず殺到せんとせり。折しも警官によりて門扉鎖せられたり。而して堰かれた水の力強き如く学生之に一場の活劇を演じて潮の如き勢いを以て遂に門扉を破砕するに至れり。

五月三十日（火） 開会午後一時 議長 上野賢太郎（旧四） 副 高島秀勝（四）

駒込署長来場、一条の訓話あり。昨夜の行動について、学生の後藤哲雄、波津久統重、関根の三君拘引せられしことは残念。四時半大和座（本郷三丁目）において、第三回公開演説会。散会は十二時ごろ。

五月三十一日（水） 午前九時 議長 青影（旧四） 副 迫田順一（三）

後援会長奥宮衛より報告あり。即ち賛成者、頭山満翁以下二十三名の多きに上れり。又奥宮氏私用のため後援会より脱会せらるることを大角氏より報ぜらたりと。

### 3. 高橋琢也訪問後の学生達の活動

（6月2日～6月11日）

六月二日（金） 開会 午前八時 議長 波津久統重 後援会委員の報告あり。又提議として後援会相談会開催の事につき、満場一致を以て可決なし、頭山満翁をしてその發起人たらしめん事を希望せり。

この日に長委三美、江並猛、藤中正らは前沖繩県知事・高橋琢也を訪問し、高橋琢也の多大な同情と出馬の承諾を得た（詳細は前号に述べた）<sup>3)</sup>。この日を境に学生達の運動の状況は急変していった。茨城県人・学生達の佐藤進男爵訪問（6月5日頃）に続き、後援会係の一人であった長委三美が高橋琢也の密命を受け、紹介状を持って各界の名士を訪問することとなった（前号詳述）<sup>3)</sup>。とくに、6月8日に佐藤達次郎博士（のち東京医学講習所校長および

初代東京医学専門学校校長)を訪問し、さらに6月9日に佐藤進男爵を訪問し、全面的な応援の意思を確認したことは新医学校設立に向けた運動の進展を決定づけた。また、県人会の学生数名は県の先輩や名士を訪問した。しかしながら多くの他の委員達は自分の役割に徹して仕事を行ない、学生会議を頻繁に開催することにより脱落者の流出を防ぎ、結束を図った。新校設立に関しては極秘事項のこととして、学生の中でも本部会(中本富太郎ら)と後援会係(三輪新一、長委三美ら)を中心とする学生達だけが知っていて、全て秘密裡に事が進められたのである。それは決して日本医学専門学校側には漏れることはなかった。また高橋琢也や寺尾亨、福本誠らの命を受けた長委三美がさらに佐藤進の親族(佐藤達次郎、佐藤佐、三宅秀、三宅鉦一、大野伝兵衛、佐々木勇ら)や堀田正恒(佐倉藩主・子息)を次々と訪れ(6月10日～6月20日)、順天堂・佐藤一族の意思を明確にさせたことは重大な成果であった。それは7月4日の学生会議場における五名士登場へと繋がった。

以下、6月3日より6月12日までの学生達の動きと、6月12日のミカド倶楽部での学生後援会相談会の様子について記述する。

六月三日(土) 女川精太郎(旧四) 副 前田(四)

各県人会の名士訪問の報告あり。日本医専に登校せし者の氏名発表あり、除名を宣しぬ。学生全部、住所氏名を記して駒込署に提出。

前日の高橋琢也訪問についても、「奮闘の半年」<sup>1)</sup>の中には具体的なことは全く記述されていない。秘密の保持を優先したのであろう。各県人会の学生は6月2日より6月12日までの間に同郷の先輩名士を訪問したが、森鷗外、佐藤進、石黒忠恵、寺尾亨らの名前は「奮闘の半年」<sup>1)</sup>には全く記載されていない。

6月8日には本郷大和座で、第四回公開演説会を開催した。演者は後藤哲雄、大角桂巖、向軍次、高島米峰らであり、夜11時まで行なわれた。

六月十日(土) 鈴本亭 午後一時開会 議長 齊藤周徳(旧4)

副 丸山郁雄(4) 文部省訪問の報告では

「要するに学校さえ善くなれば学生の幸福なのだから君等も磯部と山根を残してもいいだろう。また学校側の保証人より文部省に案を出している。」

とのことであった。このように、日本医学専門学校

側の学生保証人会も学生保証人会对抗して文部省に対して働きかけを行なっている。

6月10日頃、長委三美は大野伝兵衛を訪問した。「兼ねて新聞紙上にも承りていましたが、かかる事情とは存じませんでした。そして貴殿方の言によりは実に磯部氏は悪らつの人ですね。私に於ても同情の余り、入れとあれば後援会へも入ります。然し、真の名前ばかりです。そして進(佐藤進)は適材ではありません。代る高木(兼寛)さんか石黒(忠恵)さんなら政治手腕もあるが進にかかる才はないと存じます。然し、進が出で、諸君五百の学生が救えるとしたら大いにすすめましょう。」と大野伝兵衛は答えている。

佐藤佐(さとう・たすく)を訪問した長委三美に、「私は名を出すという事はとかく好まないが、佐藤一門としての名なら決してこぼみません。進兄のその適材たるやは存じませんが、かかる意向があったとすればすすめもいたし、どうしても共にやりたいと存じます。元より貴君方とは同職業の事です。できるだけはある一部としても、佐藤一門としてつくしたいと考えて居ります。いずれ親族会議もある事と存じますかと。其時は旨をのべましょう。そして何とか返事する事といたしましょう。」

と返事をした。また三宅鉦一は長委三美に次のように話している。

「親父(三宅秀)を紹介してくれとの事か。一体、何の目的やら。佐藤進先生を立てる事には賛成じゃ。私もかく考えた事もあったが、親父よりも佐藤家とするとあれば、達次郎先生がやるのであるから、達次郎先生より親父に頼ますのがいいではないか。親父なかなかがんこで単にいつている。学生は勉強さえすればそれでよしと。一体諸君のやり方がよくない。全く非立憲的である。昨日も文部の一人が、『どうもやり方は悪い。第三者出るとしても折が悪い』と申ししていた。まあ、私よりも何とか話しておこう。そしてかかる事は君らが云うよりも保証人とか後援会の諸君にたのんだらいいのでないか。親父へも君等があつて話すとかえって誤解をまねく恐れがあるから会わない方がいいであろう。立派な三者がたてば何とか出来得る限りつくしてあげる決心である。」

その後、三宅鉦一は東京医学講習所で教鞭をとり、医学専門学校教授となった。さらに、長委三美は秋虎太郎を訪問したが、秋は

「後援会、懇談会を開くのはいいと思う。其發起人として経過の陳述は矢張り大角君がいいと思う。私は補助する事といたしましょう。」

と述べた。さらに大角桂巖を訪れた長に対して、大角は

「佐藤（進）先生の話を書いてうれしく思う。是非やらねばならん。それで懇談会は早いがいいと思う。これは秘密にするが良い事と思う。そして高橋（琢也）さんは実に立派な人で、相談柱としてやって行きたい決心である。どうか、証介の労を取ってもらいたし。」

と言っている。このような経過を経て、6月12日の後援会懇談会が開かれることとなった。

#### 4. ミカド俱樂部における学生後援会懇談会 (6月12日)

6月12日（月）夜、万世橋ミカド俱樂部において後援会懇談会（学生側保証人会）が行なわれた。6月2日に学生後援会の代表者となっていた頭山満は参加者としては名前は出てない。寺尾亨と福本誠に託したと考えられる。「31名の来会者のうち、主な方々は齊藤孝治東京府会議長、高橋前沖縄県知事、寺尾博士、向軍次、茅原崙山、秋虎太郎、笠原文太郎、其の他の有力家」であったと、「奮闘の半年」<sup>1)</sup>に記載されている。長委三美の記録には、さらに福本誠、大角桂巖、熊谷直太らの名前も入っている<sup>8)</sup>。この会は高橋琢也、寺尾亨、福本誠らの中心人物が大角桂巖とともに開催を計画したと考えられる。また、後援会相談会のメンバーの中には日本医学専門学校理事・磯部検蔵に同調する、いわゆる妥協派の人達は何名か含まれていた。この日の会合で両者の意見の相違が明確となった。この会の出席者の発言が、長委三美により具体的に記されてある<sup>8)</sup>。

万世橋楼上、みかどほてるに後援会懇談会を開く  
六月十二日午後六時より

出席者三十二名 主なる人 高橋琢也君、福本日南君、齊藤孝治君、寺尾亨君、上野安太郎君、大角君、秋虎太郎君、向軍次君、茅原崙山君、熊谷直太君、笠原文太郎君

東京府会議長 齊藤孝治君：

「私は法律上としても磯部を漸に取り去る事は

出来ぬと存じます。殊に学生の一部には登校を望み、且つ古山の老親を悦ばす上に於ても一日も早く復校し其上で更に理事二名と評議員二十八名位作る。今後の経営の目的に達せん事を祈ります。勿論、磯部、文部省の責任は充分問う考えで居ります。」

大道社 大角桂巖氏：

「私は今更磯部云々などナイト存じます。かかる偽善者は文部のため、国家のため、教育会、否、国家（社会）よりほうむるべしと。ただ我一人のみならず。島田三郎氏も申しておられました。」

法学博士、寺尾亨氏：

「先ほど齊藤先生の説も良いようなれど、然し磯部氏の人格には定評あるのみならず、実に学生とは絶対的に入れられざる関係ある様に承りて居りますから、学生はあくまで突進せん事を祈る。其上で大いに取るべき方針を立たんと存じます。」

慶大教授、向軍次先生：

「実際私も学校騒動を起しまして今日の向軍次となった次第でございます、公開演説の説とは異なって居りますが、武士道云々よりも世渡りの方法として齊藤氏説が深索と存じます。実際学生が困るのである。向軍次ならこそパンをくっているけれども、医専の学生はパンすら食う事出来ぬと存じます。要するに柔軟派ようして、この解決につとめられたし。」

その他 高橋先生、茅原崙山先生

このように齊藤孝治（東京府会議長）は大角桂巖、寺尾亨らとは考えが相容れなかった。齊藤孝治や笠原文太郎らは日本医学専門学校に学生達を復帰させて問題解決しようという考えであり、磯部検蔵と既に協力関係にあった。一方、大角桂巖、寺尾亨、福本誠、高橋琢也、秋虎太郎はあくまで学生達を支持し、新医学校設立を目指すという考えであった。保証人会はこれら2つのグループにはっきり分かれたことから、この時点より学生側保証人会と日本医学専門学校学生保証人会（妥協派を含む）の2つが独自の行動をとることとなった。このように、この懇談会は齊藤孝治や笠原文太郎らの別行動派の選別には有効であった。齊藤孝治らは学生達の応援者の中心人物はあくまで大角桂巖であると認識し、これ以

降も高橋琢也、寺尾亨らの参加を過小評価していた。また佐藤進らの参加と支援については全く気付いていなかった。斉藤らは早速、翌日より学生達に日本医学専門学校復帰の勧誘を積極的に行なった。

### 5. 長委三美の名士訪問 (6月13日～6月25日)

ミカド倶楽部における学生後援会懇談会の翌日、斉藤孝治と、同調する関幸太郎は学生達の代表5名を呼んで次のような提案を行なった。

「山根、磯部を残しおき、通常理事を五名及び評議員十名をおき、退停学処分者の取消しを条件として帰校すること。」

学生達5名は山根、磯部を残すことは不可能であるとして、その案を却下した。6月14日には斉藤孝治らから次のような葉書が学生達に届いた。

「拝啓 日本医学専門学校に関する件に付き、諸君の前途憂慮のあまり、此際至急小生等の意見御話し申度候間、保証人同伴万障御練合せ、御会合相成度、此段御案内申上候、敬具  
場所 神田区神保町南明倶楽部

日時 大正五年六月十五日午後四時

大正五年六月十四日 笠原文太郎、

蔵園三四郎、関幸太郎、斉藤孝治、本間広清

これに対して学生達は、笠原、斉藤らの開催する保証人会には参加しないことを決議した。また、笠原、斉藤らの保証人会に調査のため参加した学生の報告では、「八百名の招待状に参加者は二十名のみ」とのことであった。その会において斉藤氏は「学校より磯部を去らしむること不可能。」、関氏は「諸君が学校に行かなくとも新入生が入るよ。」、笠原氏は「諸君を医師になしたいのだ、その外に何も無い。」、蔵園氏は「軟派硬派のあるべきに非ず。早決を要す。」、本間氏は「参集者少なきは学校側に反対なる証なりと。」と述べたとのことであった。このように斉藤、笠原らの主催する保証人会は不調に終わった。

一方、6月12日の夜以降、高橋琢也、寺尾亨、福本誠らにより新医学校設立にむけた準備が着々と進められた。とくに高橋琢也は長委三美に紹介状を持たせて、佐藤進や佐藤一族、佐倉藩主子息・堀田正恒を訪問させ、佐藤進とその一族による新医学校の設立を強固なものにしていった（前号に詳述<sup>3)</sup>。長委三美の日記<sup>8)</sup>に堀田正恒伯爵を訪問した記録と、その晩の福本誠への報告の話が残っている。

大正5年6月18日（午前10時） 佐倉の殿様、堀田伯爵閣下を向丘（弥生町）別邸に伺う。

弱者佐倉惣五郎が強者に勝ちし。其名、なにしよう堀田の殿様、年青なれど雄を忘れぬ武者振り。頃は六月十八日午前十時。通る応接間をば奥え奥へと、緑つくせる広庭の、昔を今に榮をきそいほこるらん。

「大体御話を承り確かに承知いたしました。然し僕は全て速答する事をいたして居りません。それは友人なり相談する機かんもありますから。それにはかり、又、佐藤家の様子、意向も正した上で何とか御様子申し上候ます。佐藤様とは元より深き関係とも相成つとりますが、私がお進めいたしましたによりて、学校建立後で如何と相成っては誠にすみません。責任もありますから其辺ご承知下さい。」一時間余り話したのち、別れをおしむ。

堀田正恒は佐倉藩主正倫の子息であり、佐倉順天堂党主・佐藤進とはつよい信頼関係があった。また、同藩家老の子息である渡辺暢と寺尾亨、福本誠らは法学校（のち東京帝大法学部）以来の親友であり、渡辺と寺尾は姻戚関係であったことから、渡辺暢が堀田正恒への仲介の労をとった可能性が高い。明治維新を大分経過した時期とはいえ、佐倉藩主の子息が紛争中の一学生に面会することは通常ではありえない。早速、この日の晩に長委三美は福本誠邸を訪れ、報告を行なった。

大正5年6月18日（午後8時） 福本日南（誠）先生を丸山新町に

（長）「実は其後如何して居たかと思って伺った次第であります。尚、明日は千葉に参ります。久し振りに佐藤、三宅家に就き、尋ねてみようとも思っている次第です。」（福本）「堀田伯爵より説くのも一方であると思う。学生解散をするも、今少し時期を見るのが肝要である。四十七士の義侠も実は内面の苦心と時期の問題に、外敵より七分苦しんで居るのである。団結は切に大切であるから。今解散すると元気がぬけるから、今は少し。先にした方がいいと思う。」

このように、堀田邸訪問については福本誠と寺尾亨より指示が出ていたと考えられる。堀田正恒は大正6年に東京医学専門学校設立委員会に多額の寄付を寄せている<sup>10)</sup>。なお、佐藤家と三宅家（秀、鉦一）は親戚であり、いずれの家系からも医学界における



指導的な立場の人達が多く輩出し、医学界に大きな発言力と影響力をもっていた。

一方では、長委三美（2年生）は後援会系の活動を通して福本誠や寺尾亨に私淑していた。この時期、同じ後援会系の先輩であった三輪新一（旧四年生）とともに、福本邸に招かれ一息ついている。

前代議士 福岡新聞社長 福本日南先生を丸山新町に

今夜、琵琶を弾く人が来るからききに來いと案内あったため、三輪様他二人と共に。來客二人。奥様と令嬢等。琵琶は薩州出身の者。学生により。先生の作。旅順に。その他。蓬萊山、仏法もの。

先生、切々状に。「薩摩琵琶は薩州の本場に限るね。どうも東京の人々などは美して聞こえて感情が更がない。筑前のいーところは荒紙祭りにかきたてるあの琵琶だねー。どー声何ともいえぬ風情がある。また、近頃何とかかんとかいろいろの説も出来るようだが、五弦なんか。柳琵琶は昔から4つの緒とあるわね。」いろいろと話は移り移りて、「おれは小敦盛なんかすきだね。」たまたま來客の一人、「近時、実業の世界にフランス人の魂を出してくれとありますが。」と申しかけると、「いや仏人もナポレオン一世の時代が花で、今はまるで婦女子の様ですね。生來、私の巴里に居る時なんか仏人の魂まるで話になりませんでしたね。これでは戦争に勝てないと。丁度、盛夏の候、兵士の日炎病にかかる、者数知れず、風儀整わざる者多くありました。どうも仏人は男子の勇がないようですね。仏国でも立身し、また男子らしきは。しかしいづれですわね。ズー・カールーの如き。これはナイトの後裔と存じます。日本でいう源平時代の如し。平の清盛、源の義家の如く、ノを入れたものです。これはまた独逸にても皆つけていーてましたね。それにつき、大砲の事を国つぶしというが、これは初めて種子島に伝わり、大いに国にいれたもので、これがために今まで禁じていたクリスチャンを信ずる様になりました。クリストのために、大砲、銃が輸入出来るのですからね。それで国くづしといったものです。」

「ほか二人」とは三輪新一の修猶館中学の同級生であった原田浩平と上野賢太郎であろうか。三人の学生達は寺尾亨や福本誠の修猶館中学の後輩であった。

長委三美はさらに6月25日に麴町区中六番町に住む高橋琢也を訪問した。

大正5年6月25日 高橋琢也先生を中六番の邸に

「昨日、大角君の意件を出した時、寺尾、福本君はすぐ賛成であったので、元より私も学生の賛同なら意件無し、と通しておいた。それを見るとまだ学生の意向が不明でないかの様に思われる。凡て何卒では。人事をつくすべきで、あるまで尽くしてないと思う。医学の大家・吉益東洞先生曰く、「人事を尽くして死するは天命なり。人事を尽くさず死するは是れ天命にあらず」と。いろいろの方法を取り、できざるは致方なくも、先ずいろいろとやってみなくて駄目である。」

学生達が一方では高橋ら五名士に頼り、一方では日本医学専門学校へ復歸する学生がいたことから、このような発言となったのであろうか。長委三美はその後も、富士川游博士（臨時脚気病調査委員会委員、医学史研究大家）、矢部達次郎（海軍軍医学校長）、本多忠夫（海軍軍医総監）、井上角五郎（長委三美の保証人、実業界のトップ）、藤井庄一郎（東京市立・施療病院事務長）、森村市左衛門（森村組創始者）らを次々と訪問した。そして、7月4日の五名士登場を迎えることとなった。

学生達の日誌（奮闘の半年）<sup>1)</sup>には以下のように記載されている。

七月三日（月）午前九時開会 正 石橋茂樹（旧）  
副 荒瀬（三）

報告事項、明日後援会の有力なる人、当亭に臨場し、全学生より委任状を呈出され度き由なれば、各自は二銭収入印紙及認印を持参すべし。次に波津久君御尊父に約五十円にて碑を作り、碑文は後援会の高橋琢也先生に御願ひしたり。

## 6. 学生会議場への五名士の登場

（7月4日）

七月四日（火）午後一時開会 正 野尻磁吉（旧）  
副 中村丈夫（四）

委任状を各自に渡す。

委任状

今般、大角桂巖、高橋琢也、福本誠、寺尾亨、秋虎太郎の五名に対し左記事項を委任す。

1. 日本医学専門学校に於て磯部、山根両理

- 事を排斥したる時は復校に至る一切の措置
2. 前項の目的を達せざる時は後援会新経営の医学専門学校入学の手続きをなす事
  3. 前項の学校設立せられたる時、其の事後を問わず適宜の時に、日本医学専門学校の退学願書提出する事
  4. 右の外、不利に陥らざるために臨機の処置をなす事

大正五年七月 日

原籍

現住所

姓名

本日は尤も重要な日なる故、出入及電話口等に調査委員にて充分警戒すべしと注意あり。

協議事項（日本医学専門学校）学校側後援会より左記の書状、各学生に配布せり。

拝啓 日本医学専門学校紛擾に関しては乍不及先般来、諸君の前途に対し甚だ憂慮罷在候。結果、小生等は生徒諸君中の有志者を代表する某々有力者と学校当事者と会合致し、種々協議の結果、別紙覚書の条件を協定致し候。思うに協定の要点は財団を整理し、一日も早く文部省より指定の認可を受くるに在りと存じ候。故に生徒諸君の新任する理事並びに評議員を選定し、叙上の目的を一日も早く遂行せんことを期することは蓋し生徒諸君が終局の目的を達する道なるべきを以て、此際別紙の条件にて御満足なる諸君は本日六日午後七時までに復校届を御提出相成候。諸君は来る十一日午後一時本校に御参集、其席上に於て理事並びに評議員の御推薦相成度候。（中略）願くば諸君に於て此際深く将来を考慮せられ徒らに扇動者の壮大なる言詞に迷わず、各自極めて自由なる意思に仍りて決定せられんことを小生等最後の意見として茲に提出致し候。

不悉

大正五年七月二日

神田区神保町四 齊藤 孝治  
本郷区丸山福山町七 関 幸太郎

覚

方今紛議中に繋る日本医学専門学校事件に付、齊藤孝治、関幸太郎は当局者及び学生の利害と本市静溢の為めを慮り誠意を以て仲裁を試み、

左記条件を提出したり。（中略）

以上、協定を為したることを承認し 乃ち左に署名するものとす。

大正五年七月二日

このような齊藤孝治らの文面について検討したのち、会は一時休会となった。そして、高橋琢也を中心とするいわゆる五名士（高橋琢也、寺尾亨、福本誠、大角桂巖、秋虎太郎）が初めて学生達の前に姿を現した。そのときの様子が「奮闘の半年」<sup>1)</sup>に鮮やかに描かれてある。

自動車の響き<sup>1)</sup>するよと見る間に高橋、大角、秋、寺尾、福本の五先生来場せられ、議長の紹介、謝辞ありて後諸先生は壇に立たる。高橋先生、白髭を胸に垂れ慈父の如き温顔にて

「私は年長者として一場の挨拶をせよと云うので茲に立てり。私は諸君に何等の縁故あるものに非ず。又学校に何等恩怨のある次第にもあらず。只諸君の今回の挙が邪にあらず正である、義であるために同情したるなり。私の考えとしては出来得る限り諸君の便宜を計り、諸君が又前途に就き種々善後策を致されるのは尤もなる点なれば、私及他の諸氏に於かれても同感にて、過日来懸命にて尽力されつつある事は私のよく承知する所なり。私も元は医を志たる事あれば、殊に同情の深くなりしと思わる。茲に手の及ぶ限りは諸君のため、国家のために尽力せん。尚詳しき事は他の諸氏より話されん。」

秋先生

「私は四十七年間も此の本郷区殊に千駄木町に住居して、学校の事は新聞及学生の方より聞いて悉く知れり。其の後、或る時大角氏と島田三郎氏の許に行き、意見を聞きしに、不都合なる学校屋を打潰した方が宜しからんと云えり。又、青山博士は廃校の上、各医専に分配せしめた方が宜しからんとの事なりしが、此れは責任支出となりて議会にて問題となる故、困難ならん。然し我々が寄附にて代償せんと文部大臣に面会相談せるに、それも難事なりと斥けらる。仍って磯部、山根両氏より第三者に引渡さしむる考なりしが、之も無効となりぬ。然らば新たに学校設立せん。若し之が悪ければ文部省に責任を負わしめんと、昨夜も本多忠夫博士（海軍軍医総監）より使いありて、尽力せらる旨ありたれば、諸君も時日の永くなるも、決して心配なく、

又不穩の事なく委任状が作られたならば、ひとまず帰国されて様子を待つのが宜しからん。」

寺尾先生

「私は由来、正義の為に飛び出す癖があるので、今回も及ばずながら微力を以て尽くすつもりなり。今日、顔合せ丈けと云うのであるから之で失礼をする。」

大角先生

「今回の諸君の挙に就いて最初より私は保証人の一員として種々奔走せるため、警察及社会の一部よりは大いに誤解を受け居れり。大塚署には始終呼び出され、或いは刑事につけられ、四百余名の学生の扇動者の如く見なされ、或は将来代議士となる野心のためとか、或は新学校を建てて私利を計るものとか、或は学生に同盟を強請する等随分厄介な立場になり居るなり。かく警察の干渉や、社会の一部の風評等は自分等の運動を妨害せん目的のため、何者かの仕業なるか知り居るが、今は云わず。然して又、加納治五郎氏よりは正義のため大角が力を尽くしている事は講道館の名誉なりとお褒めを頂戴したり。斯かる区々たる風評等は余の意に介する所ならず。他の四先生もやり出したらくまで為し遂げると云う頑意地の人々のみなれば、諸君も安んで今後の事を待たれたし。」

福本先生

「諸君は今や是迄の学校を忘れよ。然し忘れてならぬものは是迄の学問なり。然して、諸君は多少の時日を要しても今度の事は実行せなければならぬのである。秋冷の候迄には何とか学業に就ける様に努力せん。故にそれ迄は一端帰国さるるもよろしからんが、団結はあくまでも強固なるべし。」

次に議長より挨拶あり

「私は只今の諸先生の御言葉に対して全学生団に代わりて御礼を申し上げます。我々は抜くべからざる精神と信念とを有して、本運動を開始し居るものなれども、目下の所は恰も大海に漂える小舟の如きものであります。今後我々が目的の彼岸に達するには諸先生の御尽力による外は無きものなる故、何卒御助力の程を切に御願ひ致します。」

迫田君

「私は今諸先生に御面会出来たるは実に親に逢

うよりも喜ばしく感ずるものであります。私共は片時も正義を忘れし事はありません。而して利に迷わされ、邪道に趣くものでありません。世間には私共を助けると云いて、我々を不利に陥らしむ者もあります。然るに諸先生にはあくまで我々に誠意を以て御尽力下さるのを見て、益々吾々の決心と団結は固くなりました。最早一步も退くと云う事は御座いませんから、何卒御尽力の程を御願ひ致します。」

四百余の学生の瞳には露を宿せり。感謝の涙なり。誰人が感奮せざらん。大海に漂うこと六十余日。苦心空しからず。破船を捨て、鉄船の救綱によらんとす。各自の胸には電流の如く伝る安心と、それに伴う責任を感じ、暫くは神聖なる殿堂の如く会場を緊張せしめたり。やがて諸先生退場。

四時五十五分解散

この会で新医学校設立に向けて進行中であることが五名士によって初めて明らかにされた。学生達の安堵は如何ばかりであったか、想像を絶するものがある。学生達は五名士に全てを託すことになった。また、年長者であった高橋琢也を中心として新医学校設立に向けた動きが具体的になっていった。しかしながら、この段階では新学校設立の構想は学生達には示されていない。

## 7. 柳光亭における新校設立懇談会

(7月13日)

学生達の日誌には更に次のように記載されている。

七月五日(水) 午前九時開会 正 小野庄次郎(旧)  
副 渡邊司法(四)

文部省訪問、佐多君委員報告。福原次官、大津参政官に面会せり。我々後援会の事につき、懇々と申し出で、近日の内その腹案を提出するならんが、其の時は必ず採用せられん事を願ひたり。次官曰く、

「学校の廃校問題は目下の所不明なり。学校にては学生復校の気味なりと云うて居れば、次官は之を認めている次第なり。文部省にては斉藤、関両氏の案は未だ来て居らず。」

七月六日(木) 午前九時開会 正 酒井敏雄(旧)  
副 中川進(四)

県人会主任の改選。軟分子を除き、各県人の主任を定む。

七月七日（金）午前九時開会 正 金成忠義（四）  
菊地秋水（三）

報告事項軟分子処分方法。彼連中の意見として学生団は此の際、妥協案を取るより方法がないと云えり。如何に説き勤むるも、頑として復校希望なる故、除名するが最もよき方法ならん。協議提案 近々、学生団は一時解散すべきにより、各県人主任及副主任を上げて、これ等の人々は東京に残りて、種々の事務を取り、帰国せる人々との連絡を計りたし。それにつき、本日散会后、各県人会を開き、慎重に審議する事と為せり。

七月十日（月）午前九時開会 正 土志田政治（四）  
野家敬之（三）

目下、日本医専に通学者は各級通じて四十五名。日時は不明であるが、この頃長委三美は海軍軍医総監・本多忠夫を訪問している。その時、本多忠夫は「実は先日、藤井（庄一郎）君を頼んで秋（虎太郎）さんのところへも参り、己の意のあるところも秋さんの意のあるところも図った。大に同情し、陰になって尽す考えである。先日中央衛生会で医学の大家（中濱東一郎のこと：後出）とも話したが、学校の利もあるとのことであつた。まあ、それはいいとして、此度の柳光亭の会に出ることは許していただきたい。承知の通り、軍籍にある身だから、そんな会に出るのは困る。で、自分の意のあるところは佐藤（達次郎）君も宮本（淑）君も石黒（忠恵）閣下もよく知っているから、伝えておく考えである。勿論佐藤さんの立ってくださる事は至極賛成である。」

と話している。7月12日の柳光亭における新医学校設立を具体化するための会合について、この会話の中に出ている。東京医科大学に残っている資料の中で、「柳光亭」（隅田川沿い、両国・柳橋の有名な料亭）という会場が記載されているのは唯一この会話のみである。

この時期に学生達は次々と日本医学専門学校に退学届けを提出している。学校ではそれを承認するかどうか、混乱していた。これは次の7月11日の学生会議における報告に良く表れている。

七月十一日（火）午前九時開会 橋口徹志（四）  
緒形晴逸（三）

天谷校長より、その被保証人たる学生、石川内

蔵之助君に停学解除の通知書来る。古川君報告。昨日退学願書を提出に行きし所、学校には事務員一名と八木一派の学生のみ居たり。塩見学生監は病院にあり。電話にて曰く「君等持参の願書中には已に退学許可と成りし学生の願書もあり。故にその全部を受領するを得ず。各個人にて提出すべし」と。依て提出を見合わせて芝白金なる樫田学監を訪問す。学監曰く、「僕は山根とは知己なるも、磯部とは何等の関係なかりき。偶々五月三十日初めて学監との相談あり。其の後、数回の願いに接し、学監の職に着き居る者なるが、故に本問題の内容は善く知らず。但しこれまでの状態を見るに君等の奮起したのは尤もと思う点もあり。去る七月六日教授会を開けるが、来るもの十四人の少数にて止むを得ず。自動車にて不参者を集め、四名来会せしむ。席上にて小川博士曰く、「学生中に不良の徒多し。全部退校すべし」。中原博士曰く、「退校は不当なり。退校希望者に許可を与うべし。」と。結局、父兄より取り消しの来たりしもの百八十七名を除き外全部二百四十二名を退学許可（全429名）と決せり。」云々。

退学願書に付きては、個人にて行けば混雑するを以て、警察の助力により本日学校も受領する事となれり。

七月十二日（水）午前九時開会 議長 川村広一（四） 副 波津久宗統（三）

法律係報告、調査係報告

七月十三日（木）重要議事なし

この日の午後、柳橋の柳光亭において新医学校設立のための会が開催された。この会については「奮闘の半年」<sup>1)</sup>には一言も述べられていない。徹底的に秘密保持が行なわれたのであろう。長委三美の日記<sup>2)</sup>では、その日の早朝の中濱東一郎への電話で「今日は如何なるお話しですか。ハ一。丁度、今日は差支えありまして、会には出られませんね。一体如何なる会です。ハハ、高橋様や君から電話が来たし、何しろ鎌倉に行きましてね。昨夕帰って来た次第です。それで昨日午前九時来て下さいと申しておきました。その話で来るんですね。そうですか。それは佐藤（進）さまなら一点の批難のないいい事ですがね。実は午後一時から内務省の中央衛生会へ是非行かなく

てはならぬ。それから時間があつたら参りましょう。どうです。9月から仮の校舎で授業を始めては。教授なんかすぐ作られます。そしてポリクリはあちらこちらの病院を願ってやっでは。それがいいですよ。そうすれば是非建設せる事となります。磯部が評議員なんか。已れはそんな者ではありません。どうぞ安心してください。此の病院なんかつかつてもいいですよ。その位のことは思っていました。諸君には同情に堪えません。」

という会話がなされた。短いながら、この長委三美と中濱東一郎との会話には多くの重要な内容が含まれている。「今日は差支えありまして、会には出られませんね。」というのは柳光亭での新校設立のための懇談会のことをいっている。中濱東一郎日記<sup>12)</sup>に「7月13日。終日小雨。深川門前仲町伊藤半次郎氏方に往診。旧日本医学校生徒の為に学校新設するに付き、有志者両国の某亭に会す。予も本日初めて之を知りたるか為出席するを得ず。中央衛生会特別委員会を開く。予出席」と記述されており、「実は午後一時から内務省の中央衛生会へ是非行かなくてはならぬ。それから時間があつたら参りましょう。」と一致している。「高橋様や君から電話が来たし、」とあるように、当時の東京においては電話が一部の人達には普及しており、ここでもそれが活躍している。また「9月から仮の校舎で授業を始めては。」は実際そのような運びとなった。「午前九時来て下さいと申しておきました。」ということから、高橋琢也は中濱東一郎を9時に訪問し、中濱の多大な協力を得ることとなった。「9月から仮の校舎で授業を始めては。教授なんかすぐ作られます。そしてポリクリはあちらこちらの病院を願ってやっでは。それがいいですよ」と長委三美に語った中濱東一郎の話は後述の7月15日の高橋琢也の「訓話」の中に詳述されている。「磯部が評議員なんか。已れはそんな者ではありません。どうぞ安心してください。」という会話からは、磯部検蔵が中濱東一郎を懐柔して日本医学専門学校支持に取り込もうとして動いていたことが伺われる。

この日開かれた柳橋・柳光亭における懇談会の内容については、「奮闘の半年」<sup>1)</sup>にも、長委三美の日記<sup>8)</sup>にも全く記載がない。しかしながら、次章の7月15日の学生会議場における高橋琢也ら三名士の話よりその内容が推測が出来る。

七月十四日(金) 午前九時開会、正 安部達人  
(四) 副 波津久宗統 (三)

注意事項 明日及び明後日に亘り或る重要な報告がある故、必ず出席する事。

7月13日の懇談会の結果を受けて、高橋琢也、寺尾亨、福本誠らは7月15日に学生達の前に再び姿を現すこととなった。その日は総退学した学生達にとって最も重要な日となったのである。

## 8. 学生会議場における高橋琢也らの新医学校設立の説明と学生団解散(7月15日)

七月十五日(土) 午前九時開会、正 後藤哲雄(旧)  
副 迫田順一(三)

報告事項 後藤哲雄君、「吾々が五月一日以来の悪戦苦闘、今日まで八十日に亘り、而して多くの後援者を得たる努力を頌し、吾人の為すべきことは大部分なし尽くしたれば、今日後は後援会の方々及裏面の同情者に頼らざるべからざる」を説き、今日以降休会すべきを宣言す。

後援会委員・三輪新一君、「六月十五日、日比谷松本楼における後援会の五氏会合の際における「第三者の起つにあらざれば此の問題を解決せず」との決着を報じ、「当初の目的に向かって進行しつつあり」と云い、「十三日或る有力者に会見の結果、学生の取るべき手段は尽きたれば、今日以後学生の会合は殆んど不必要となれり。今後の仕事は学生に煩わすにあまりに事大なりと後援会の委員に言われ、而して只吾々学生の団結に待つ」と述ぶ。

注意事項 中本富太郎君、「一日も早く目的を達して祝杯を挙げんには、吾々の団結如何による。団費未納者は今日中、各県主任まで納付せられんことを願う」

演説 迫田(寺師)順一君、「本日は実に喜ぶべき日なり。近々学生団は全漸学校と手を切ることとならん。学校は益々悲境に陥り、自滅する日も遠からず。三先生が御出席になられたならば謹んで敬意を表し、九月には再び上京、楽しき団欒の内に学びの道を励まれたし」云々。

原三郎君。「過去数十日間、一条乱れずして今日の如き楽しき日を迎えるは大なる喜びなり。諸君の団結と後援会係員の努力には永久に記念とすべきものなり。」云々。

おりしも十時五分、高橋、寺尾、福本三先生来場、

左の訓話あり。

高橋先生訓話

「承れば諸君は本日より郷里に居らせらる由、しばらくの間袖分かつ事となります。就いては何か一言申してくれるとの事で参った次第であります。今回諸君が御帰省なさるや、諸君にとって業終え、錦を着て古山に帰らるならば、この位満足愉快なる事はないと思います。然るに不幸にして学半ばにして思わざる障害のため業や中途にして前途の方向も如何やと憂慮しつつ帰郷さるので誠に諸君の愛惜は察します。不愉快に存知ます。これがため、諸君のみならず父兄、親戚、知友皆不愉快を感じられることで遺憾なる事であります。然し前途は果たして憂慮すべきか否や。これがため吾々同志の諸君のために目的を達せられる方法を講じつつあります。処がどうやら目的を達する事が出来るようである。天高く読書の頃になったら新教授が出来ることと内心楽しんであります。一昨日はある会合に行き、やむを得ず昨日会した。元より医学の大家で立派なる病院も持ち、年齢も学識も充分なる先生。医者は古きを良しとし、薬剤師は富んでなければならぬ、理髪師は若きを良しとす。昔から医者とかぼちゃはひねた方がよいと。然るに其人は深く同情されており、前校長にと行った事のある人だそうだ。「新経営はあまり困難ならず、場所さえあれば教授はできます。それですから講義を9月からやっては。機械も医者ももっておれば。ミクロスコープはかりる事はできます。病院はお使いになっていーです。教授不足なら私も出てあげます。」となかなか同情してくれました。また、一方、秋さんは経営の任にあたり、此事もなると思う。故に、諸君は前途、さまで憂慮せられないでいーと思う。帰省後は父兄、知人、親族の方々に心配されぬようよくお話しになった方がいいと思う。先頃、波津久某君の尊父が此事に関し絶命されたという事を聞きましたが、かかる惨状が又とあってはすまぬ事である。どうか御心配をかけぬ様祈っております。同時に十分に忍耐してどうか静かに郷里に静養せられん事を。つい青年の時代は当人も活業にはやるものである。不愉快の事があると知らず知らず烈きするものだから、十分に忍耐してもらいたい。

楽翁公が曰く、浅野内匠頭が煙草一ぶくきざむ間待てば、かかる事は起こらなかつたのである。又この手紙は急ぐからゆっくり書いてくれという事がある。ドイツの金言にも「時は医薬」なりと。時間は最良の医薬と。これは私の老婆心のみ。いずれ人間が社会に立てばいろいろの障害があるは当然の事であります。社会に頭角を表す人はいろいろと艱難苦勞せざるべからず。孔子は三度肘を折って良医となると言われたが、其の困難を想像しての話である。曰く、青年は四回まで失敗せざるべからず。人は如何しても苦しまざればえらい人となれず。今一層進んで、青年は四回まで失敗し得ると。今回諸君が一回かかる艱難不幸に遭遇した事は実に前途の成功と位す。大器晩成と心得て、十分に休養なされ健全で居てもらいた。健康は美事の基とやと。私は大に切に諸君の健在を祈り、又九月の好時節に再びにこにこで会合せん事を。」

この高橋琢也の訓話の中で、「孔子は三度肘を折って良医となる」という話は東京医学専門学校校歌ヒポクラテスの三番「三度肘を折し」にそのまま入っている。また、訓話の中で、「医学の大家で立派なる病院を持ち、年齢も学識も十分なる先生」とは中濱東一郎のことを指している。

寺尾先生訓話

「只今、私等の年長者・高橋先生がいろいろと御懇厚なるお話があった通り、尤阜、一言もつけ加える必要はありません。蛇足であります。一寸ご挨拶いたします。前申された通り、学科の方でもかかる望みあり。秋さんは引受け、やるとの事でどうやら望みは立った様です。ついては一寸申しておきたいが、誰が引き受けるのだ、だれが教授業を世話するのだといろいろと詮索したりいろいろと申されぬほうがいーと思う。諸君は休暇で帰郷なされていろいろと余り心配されぬ方がいいと思う。然しながら余り意気軒昂も考えるべきと思う。どうか静かに心を満足せしめて健在を祈ります。仮に此 事ならずとも今日の意志薄弱なる世に於て人心のやかましき御世にありて此青年がかくも正義に叫び七十何日間の一条乱れざる団結は実に青年の亀鑑と満足せられて実に結構なる事と思う。どうしの身神を鍛錬し、諸君の健康を祈る次第であります。」

## 福本先生訓話

「えー、只今高橋先生がいろいろとご懇厚なる話があって更に申し上げるは蛇足であると寺尾先生が申されたが、更に私が申し上げるは、蛇足のまた蛇足であると思う。只お別れの挨拶だけしようと思う。今休会せられる事は賛成であるが、如何にもこの頃の天気は移りかわりて、天気にあるやら雨になるやら。然し梅雨も去ったからきっと晴天に盛夏し、益となるべきであると信じます。一体私は物の思い切りのよいほうであるが、昨今のように生活難切なる時に徳と利と害のみを思えど、かくも七十何日間よくも忍び耐えて、尤始の考えを通し、然もよわそうな医学生にかかる精神は実に前途望あるを感心に堪えません。又、今日から帰郷せられるは此までの日本医専にあいそをつかし帰らる事で、二度と足を入れんという決心を含むと思う。依って益、私ただ尽力せんと思う。日本人の熱中はよくラテン人に似ると。時局は恐れをけすと。集まって居る中は、元気天に満つ子も、散らばる勇氣もなくなり日に疎くなるが世の習いである。又誘惑もいろいろと方面をかえて来る事と。世間の邪悪は必ず欠点を見、必ず真正面より来らず、横よりくるものである。精神試験はよく折角の正義のために。この正義は一貫せざるべからず。さらば古山にあらせられても精神の修養につとめ、如何なる諸悪来るとも最初の御血に対し、血に笑われざることを祈る。残らる委員は責任は大にして注意あらん事を。此三ヶ月は実に勝敗の分かれ目で、三ヶ月間には勝利の目鼻つく事と思う。ここがベルダン戦である。地球戦である。ドイツが勝つか。連合軍が勝つか。楽観も悲観もせず、ゆったりかまえて、十二分の注意をもち勇戦されん事を切に祈ります。何卒諸君のご健康を祈る。」

十時五十分、三先生の訓話終りを告げ、再び演話を開始す。

波津久宗統君、喜びを述べ、尚最後まで強固な意志を続けられん事を乞う。

次に質問に移り、「級代表者として在京する人には如何なる程度まで本部に関与し得るや。」後藤哲雄君答えて、「県人会主任及び級代表者は他に重大なる責任ある故に、後援会に口を入るを余り好まざる也。」

注意事項：小野庄次郎君、「休会后団結を保つ機関、連絡の必要上の注意をなす。」

1. 退学許可書は本部に於て保管す。
2. 解散後学校側より通知ある時はその書状を本部に送る事
3. 県主任の発する通信は必ず主任の認印を押す事
4. 帰省前には在京保証人の許に立ち寄り、今後学校側より何等の通告あるも会合又は返信を為さざる様にする事
5. 本部よりの通信には本部の印あるものに限る。明日、午前九時より各県人主任及各級代表者は鈴木亭に集るべし。今後も会場を当席と定む。尚本部員を代表して一言す、「帰省中も身心を養い、新秋九月には相互に健全なる笑顔を見ん事を希う。」

議長茲に散会を宣し、天皇陛下万歳三唱 学生団万歳三唱

拍手裏に全員散会、時に午前十一時二十分。かくして吾光榮ある学生団は茲に休会となりぬ。遂に識者の同情となり、後援会の諸名士によりて血潮の花は実を結び、学生始め関係者の等しく歡喜の内にめでたく此夏を過ごさんとす。快なる哉。

上村透のこの文章で、学生達の奮闘の記録「紛擾真相録（1月より7月まで）」は終わっている。

## 9. エピローグ：東京医学講習所開設への道 (7月16日～9月11日)

7月16日以降、高橋琢也を中心とする五名士の努力により、東京医学講習所設立の準備が進められた。その間の詳細な記録はほとんど残っていない。8月19日の中濱東一郎日記<sup>12)</sup>には「細雨終日霏々。高橋琢也氏来訪。」と記載されてある。また、同日記の9月8日の記録では「晴。夜に入り、博士佐藤達次郎君来訪。旧日本医学校生徒に対し、来十一日より講義を開くことを告げ、明後十日神田タカラ亭にて講師の集會を催ふし、受持ち時間を定むる筈なりと云う。」と述べられている。9月10日には「日曜日。晴、夕淡路町多賀羅亭にて、医学講習会時間割を定め、夜食を共にす。予も出席し、八時過ぎの汽車にて鎌倉に行き一泊。」と書かれている。

「奮闘の半年」<sup>1)</sup>には次のように記録されてある。八月二十四日(木) 午前9時半開会。主任の手より「通告第一」を団員に發達する。

通告第一

拜啓。予ねて申進候、学校の儀着々と進捗し、

校名を私立東京医学校と称し、本校を東京牛込区神楽町二丁目二四番地東京物理学校内に仮設し、来る九月十一日より開校授業致候に付き不取敢この段及御通告候なり。大正五年八月二十三日 大角桂巖、高橋琢也、福本誠、寺尾亨、秋虎太郎

九月六日（水）午前9時開会。「男爵佐藤進、医学博士中濱東一郎両氏が顧問になることの快諾を受け、佐藤達次郎博士が教務上一切の準備を行い、教授も全部決定した」と告げられた。

九月九日（土）午前9時開会。後藤（哲雄）議長の宣言により、学生団の解散式が行われた。

新医学校（東京医学講習所）の教授は、佐藤進や佐藤達次郎を中心として人事が進められたと考えられる。また、石黒忠憲、森鷗外を中心とする東京帝大医学部出身者らはそれに対して多大な援護射撃を行なった<sup>3)</sup>。

一方、齊藤孝治らの妥協派が山根正次理事長とともに各名士を訪問し、攪乱させるという行動を行なったが、既に手遅れであった。7月19日頃、長委三美と前田燐之助（三年生）とが齊藤孝治を訪問しているが、その会話からもそれが明らかである<sup>7)</sup>。

東京府会議長 齊藤孝治氏を神保町に

長「先生はご多忙にもかかわらず、学校の事件が起りましてより以来、後援者となり、色々ご尽力くださいまして有難う存じます。先日懇々と閣様と兩名にてお手紙下さいましたが、私どもの意と一致せず、何たる返事もせず失礼いたしました。じつは今日は然るべく御礼を申し、尚先生がかくお動きくださるは、元より学生の他ならず。然らば秋（虎太郎）後援者と共に歩調を取りやってもらったらと存じまして学生総代でなく、委員でなく、個人として参った次第であります。」

前田「一体、妥協案、妥協案と申すが、人によりいろいろの事申しまして、真意を置く事が出来ませんが、如何なるものでありましょう。山根、磯部はこのままと申す人がいるようですが。」

齊藤「は、そうです。諸君は押し出せ、押し出せと申さるが、財団法人であるが名のみで、実は磯部のものですからね。謂わば、ご主人を追い出すのですから、それは出来ぬ事です。」

前田氏は憤然として曰く、「かかる月日をとるまで。犠牲を多く出さぬ時なら何ぞ。然し、其れも今となっては到底出来ません。」

齊藤「あなたの申さるは真意でしょう。どうも一貫したことではないと思います。それは指定を取りに紛れ騒ぎで。今となっては山根、磯部をおっばるなんては。君らの代表者曰く、指定来ても山根、磯部いては復校せんと。実に解しません。露骨に申しますれば、医学生は暗いです。其の代わり、一文字正直です。正義、正義と何の正義やら。盟約を破りなさいとは申さんも、学生時代の大切な時期を誤まれん様に祈ります。」

前田「それでは申しますが、元より妥協派も美派でしょう。始めにおいて、何故に磯部がこれを入れませんでしたろう。また、処罰者は何ゆえに許しませんでしたろう。」

齊藤「それは実際この度の学校騒ぎでも、五、六名にとはまいりません。かかる者を無条件で許したならば、又かかる騒動が起こると申して居りました。そして、今度は閣君と充分考え、また先日も申してやりました。この件起こるや、元より不徳の致す処ですから、謹慎しておられたし。」

長「そうですが、それでは申しますが、先に申したとおり、貴君も学生のためを思えばこそと存じます。故に、甚だ苦しくは存じますが、今、この案、いわゆる何時完全するやら不明の案をすてて、秋さんの新たに設立する案へ協賛して、一日も早く学生の学びしまでに尽くすことに尽力してください。」

齊藤「それは然し、私の案の方が立派に成功するものと考え、近く評議員も決め、会を開くはずで。学校過ちはなきも、学生団に江原（素六）、高島（平三郎）、荒川（五郎）先生等あり。理事もめっからず、そして秋さんがするとか申すけれど、これは出来んと思う。」

このように齊藤孝治（東京府会議長）は、学生団を応援しているのは秋虎太郎（東京市議員）と江原素六（貴族院議員）、高島平三郎（日本医学専門学校哲学教授）、荒川五郎（衆議院議員）らと思っており、高橋琢也らが進めている新医学校設立の準備については全く気づいていない。次の長委三美の7月20日の江原素六訪問によって、山根正次（日



本医学専門学校理事長)、齊藤孝治、関幸太郎らが名士を訪問し画策していることが明らかとなった<sup>7)</sup>。

大正五年七月二十日 貴族院議員、江原素六先生を本村に

江原「其後如何になりましたか。」

中村徳三郎(2年生)「じつは、御蔭ですくすくと相成りました。」

長「処が妥協派より承りました所、その決議委員に御なりになったと承り、今日参った次第であります。」

江原「そうでしたか。先日、学生3名まいりましては、『ところで学生も一段落ち着き、まあ解決となりました。それは妥協説が出まして、学生は全部これに賛成し、近きうちに復校することと相成りました。』『そうですか。それは結構なことでもあります。青年は然るあるべし。これを入れ、復校とは日出度いです。一日も早くすみ、勉強を祈ります。』と申して別れ、翌日、山根正次、齊藤孝治、関幸太郎3名が参りになりました。そこで、私は『御日出度』とまず申し上げた処、『まあ、妥協説で、これで学生も承知してくれそうですから、復校することとなり、好都合と存じます。ついでに是れ学生の方の評議員となつて下さい』と度々申され、然し私の名のために五百の学生となればかく申すことも出来ずと、依つて承知した次第であります(中略)。で、一旦承諾しているから、荒川、高島さんと相談して何とかいたしましょう。高橋(琢也)君にもよく話しいたしましょう。それはどうも折角すみませんでしたな。実はすぐにかかる報告せんのが罪でした。先週も、三宅先生へ、五委員と共にいっていただく処、ちょうど御多忙中で真意を得ませんでした。あ、そうでした。」

このように山根正次、齊藤孝治、関幸太郎らは有力な名士を訪問し、学生達が日本医学専門学校に復帰することを承諾したと嘘をいって協力を要請した。これは学生達によって阻まれてしまった。山根正次理事長と磯部検蔵理事はその後、学校より解任されることとなった。また、学校の経営も極度に行詰まってしまった。

長委三美は茅原華山<sup>13)</sup>の紹介により後藤新平(逋信大臣)<sup>14)</sup>のもとを7月18日に訪れている<sup>7)</sup>。その

会話より新医学校設立への進捗具合が分る。

大正5年7月18日 逋信大臣、後藤新平男を宮村の邸に

今しも面会している人はいざ知らず、自動車庭前に三車面。応接間ここは八畳、さすが。ルーズベルト、児玉大将の像。ここにも厳しき来客四人。また来る婦人を乗したる自動車あり。婦人は二階に通されぬ。

「其後どうになりました。」「御蔭でどうやら目的が達せたようです。」「それはいい都合でしたね。元より微力で何一つと申し、諸君には尽くす事はせざんだが。」「結構です。」「文部省の意向は如何です。」「文部省は便利に取り計らうとのことです。」「文部省の責や大であつていうまでもなく大に責任を果さなければならない。」「今後なりとも大に御後援を願います。」

また、長委三美は私淑していた茅原華山を7月25日に訪問している<sup>8)</sup>。茅原華山は学生後援会の一人であつたが、ジャーナリスト(万朝報新聞主筆)の立場から学生達を応援していた。茅原はこの年の8月に米国に長期出張した。茅原との会話からも新医学校設立の進捗状況が良く分る。

大正5年7月25日 早7時 茅原華山先生を大井の里に

「あ、早かったね。おれは一昨晚より下痢して大変だ。今も湯に行ってきた。学校はうまく建つそうだね。御日出度う。実は昨日新聞でも見るし、原三郎君から手紙よこした。何れ来ると書いていた。おれも来月15日か遅く19日にはよい出発する事とした。然しね、殆どに切符が売り切れだそう。然し出来るならば、国家のため都合するといつてくれる。行く様なら「はわい」へ一寸下りて見たい。えーとニューヨークへ行く考えだ。此度は漫遊ではない。世界の智識を集めるのだ。実はこの戦争は大したものだからな。そしてあらゆる智者、学者、政治家なるものが此ニューヨークに集つてののだ。この大市の片田舎に大井町があるだろう。戦後の日本を開拓すべく行くのだ。何時かえるか不明である。なんだか政変がありそうだな。どうしても駄目だ。隈候は佳冠の意はないらしいね。ハハ……。学校もうまく行つたね。弱者が勝つた事となつたね。日本医専はあれでつぶれるだろうね。これは致方なく、さめざめした

ものだね。」「先生どうぞ記念に一筆御願ひいたします。」「よろしい。然し今日は下痢して書かない。昨日書いてみたが力出さなくて困った。書いておきます。大分たのまれて、大いに書くよ。ちょっと書くことができませんからね。」

新たに設立される東京医学講習所の構成員は次のようなものであった。

設立委員：高橋琢也、秋虎太郎、寺尾亨、福本誠、大角桂巖

顧問：佐藤進、中濱東一郎、森林太郎（鷗外）、石黒忠恵

（森鷗外、石黒忠恵は最終的には辞退）

校長：佐藤達次郎

教授：佐藤達次郎、三宅鉦一ら、28名（ほとんどが順天堂病院より派遣）

このように、高橋琢也、寺尾亨らの温かい支援を受けながら新医学校設立への準備が着々となされていった。そこには佐藤進を中心とした順天堂病院の多くの方々の協力と石黒忠恵、森鷗外、中濱東一郎らの東京帝大医学部出身者らの全面的な応援がなければ成立しなかった。校歌の一番の「源流二つ、彼と此」とは日本医学専門学校を総退学した四百数十名の学生達と、佐藤進、佐藤達次郎を中心とする順天堂病院の方々であることは明らかである。これら2つの流れが合流して東京医学専門学校となり、東京医科大学の礎となった。

9月11日に学生達が待ちに待った東京医学講習所の開設が行なわれた。しかしながら講習所といっても、東京物理学校（現・東京理科大学）を借りて

の仮の校舎であった。当時の東京物理学校は夜学であったので、昼間はその校舎は医学生達が講義と化学実習などに利用できたのである。故原三郎名誉教授が「はじめに学生一人を入れる学舎だになし」と語ったのはこの時のことをいっている。

その日、午前8時より始業式が挙行された。8時半からは、大角桂巖、秋虎太郎、佐藤達次郎、高橋琢也、福本誠の順で挨拶と祝辞が述べられた。最後には、中本富太郎（学生総代）が答辞を読んだ。午後には向島サッポロビール園にてその祝賀会が盛大に行なわれた。写真7はその時の集合写真であり、和装の高橋琢也が学生達の中心に座り、左横に佐藤達次郎、福本誠、大角桂巖、秋虎太郎と並んで座っている。そこには3ヶ月に亘る苦闘のあとは見られない。

9月15日から東京物理学校を借りて講義が開始された。順天堂から派遣された多くの教授陣により学生達の教育がなされたが、これは昭和初期まで続いた。臨床修練は外科系は佐藤進が病院長を務める順天堂病院で、内科系は中濱東一郎所有の回生病院で行なわれた。中濱日記に<sup>12)</sup>は「9月11日。曇。小雨あり。」「9月12日。晴れ。夕方曇、冷気を催ふす。午前中、物理学校の医学講習会へ参観、開講は来る十五日なりと云う。帰路、高橋琢也氏を訪問し面会。」と書かれてある。東京医学講習所の開設は高橋琢也と学生達にとっての第一歩であったが、東京医学専門学校承認に向けた新たな大きな苦難への始まりでもあった（以下、次稿に続く）。



写真7 向島サッポロビール園における東京医学講習所開講祝賀会：

表1 学生達の総退学より東京医学講習所設立までの主な出来事

日 時	主な出来事
大正5年5月16日	450余名の日本医学専門学校学生が総退学
6月2日	学生達の高橋琢也訪問：高橋琢也の全面的な支援を受けることとなった。
6月5日頃	佐藤進男爵訪問：学生達は多大な同情を得た
6月8日夕方	佐藤達次郎訪問：新医学校設立の示唆を得た。(長委三美)
6月9日夕方	佐藤進訪問：親族会議を行なう旨、確認(長委三美)
6月10日夜	森鷗外訪問(鷗外日記に記載)：内容は不明
6月10日～12日	佐藤佐、大野伝兵衛、三宅秀、三宅鉦一ら佐藤一族の訪問(長委三美)
6月12日夜	学生後援会開催(於：万世橋ミカド倶楽部、高橋琢也ら出席)
6月15日頃	佐藤進訪問：佐藤家の最終的な結論を確認(長委三美)
6月18日	佐倉藩主子息・堀田正恒訪問：佐藤進への駄目押し(長委三美)
6月20日	石黒忠恵男爵訪問：医学界からの支援を確認(長委三美)
7月4日	学生会議へ高橋琢也ら5名土登場
7月8日午後8時	森鷗外訪問：新教授陣の世話(長委三美)
7月9日夜	森鷗外訪問：学生代表・中本富太郎が訪問(鷗外日記に記載)、内容不明
7月13日	新医学校設立のための懇談会(於：柳橋・柳光亭) 高橋琢也、寺尾亨、福本誠、秋虎太郎、大角桂巖ら出席
7月15日	高橋琢也ら5名が学生会議に新医学校設立の説明に参加。学生団の解散
9月6日	東京医学講習所の顧問、校長、教授が決定された。
9月10日	講義受持ちのための懇談会
9月11日	東京物理学校に東京医学講習所開設、祝賀会は向島サッポロビール園で開催

文 献

- 1) 東京医科大学同窓会編：奮闘之半年(復刻版) 1996
- 2) 東京医科大学雑誌(高橋琢也追悼号) 1935
- 3) 友田燐夫：高橋琢也と学生達(疾風怒濤の物語)(1)。東京医科大学雑誌 67：410-424, 2009
- 4) 手東平三郎：森の来た道(日本森林技術協会) 1989
- 5) 孫 文：中国辛亥革命の指導者。革命の失敗により一時日本に亡命。その時、犬養毅の世話により、高橋琢也の住居が隠れ家として使用された。
- 6) 古島一雄：一老政治家の回想(中央公論社) 1951
- 7) 田村紀雄、陳 立新：梁啓超の日本亡命直後の「受け皿」。東京経済大学人文自然科学論集 118号：11-32, 2004
- 8) 長委三美：東京医科大学開学の礎(東医の礎)(東京医科大学) 2008
- 9) 国論(東京医学専門学校創立記念) 4巻8号 1918
- 10) 東京医科大学同窓会編：東京医科大学五十年史。東京医科大学同窓会 1971
- 11) 高速自動車：寺尾亨の盟友であった杉山茂丸の所有であり、憲兵の車も追いつかないほどの高速であったといわれる。高橋琢也、寺尾亨、福本誠、大角桂巖、秋虎太郎が7月15日に開催された学生大会の会場に乗りつけたのもこの車であった可能性が高い。「奮闘の半年」<sup>1)</sup>の中に「自動車の響きするよと見る間に高橋、大角、秋、寺尾、福本の五先生来場せられ、議長の紹介、謝辞ありて後諸先生は壇に立たる。」と記述されてある。
- 12) 中濱東一郎日記(大正5年および6年) 富山房書店 1993
- 13) 茅原廉太郎(崑山)(1870~1926)：大正、昭和初期の代表的なジャーナリスト。万朝報新聞の主筆。大正5年には万朝報新聞を退社して、執筆活動を行っていた。大正5年8月15日に渡米した。
- 14) 後藤新平(1857~1929)：台湾における民政の責任者として、台湾の安定と発展に貢献した。大正5年当時は通信大臣であった。茅原廉太郎と親交があったことから、長委三美は茅原の紹介状をもって後藤を訪問した。東京医学専門学校開設時に多額の寄付金を寄せた。